

「今週の倫理」こぼれ話

「今週の倫理」は創刊から1500号の節目を迎えました。今後とも変わらぬご愛読とご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



え・城谷俊也

本紙「今週の倫理」は、今号をもつて創刊一五〇〇号を迎えました。

一九九七年九月の創刊以来、毎週発行を重ねることができましたのは、ご愛読くださる皆様のおかげです。

第一号は、当時の法人開発局長・戸田徹男が、経営者MSの会長挨拶に苦心される会長方の一助となればとの思いから自ら執筆し、毎週話材を提供したことに始まります。

その後、水上宏局長へと引き継がれました。しかし、本紙が会長以外にも配信されていることを知り、会長挨拶のための役割は終えたと判断し、一度は廃止を予告しました。

ところが、全国から継続を望む声が寄せられ、会員向けの紙面として幾多の変遷を経て、法人局研究員が執筆を担うなど、今日に至ります。

読者層や執筆者は変わっても純粋倫理を伝えるという使命は変わることなく、三十年近くにわたり会友の皆様読み継がれてまいりました。

今後も創刊以来の趣旨を大切にしながら、精進してまいります。引き続き、ご愛読をお願い申し上げます。

倫理研究所法人局局长 和田 毅

まごころを尽くすことが

会社を助け、人を動かす

たった一人のお客様のためを思つて取った行動が新しい事業を生み出し会社を助け、心のこもった行動の積み重ねが大きな成果を生み出すことがあります。

茨城県古河市で飲食店を営む鹿島節子名誉法人アドバイザーの会社では冷凍餃子を扱っています。

きっかけは、三十年ほど前でした。当時よくお店に通つてくれていたお客様が山口県下関市へ引っ越し、しばらくして「どうしても『丸満』の餃子が食べたかったので送ってほしい」と手紙と現金を送つてくれたのです。当時は冷蔵輸送が一般的でなかったため、魚屋から発泡スチロールを手に入れたり、ドライアイスを手に入れたりするなど手を尽くして送ったところ大変喜ばれました。それをきっかけに様々な研究を重ね、また業界の関係者からの「衛生対策を万全にしたほうがいい」との助言も力にして、冷凍餃子を開発したのです。お客様のためになんとかしたい

という一心でしたが、この冷凍餃子が後年、会社を救ってくれたのです。コロナ禍の時です。店舗営業が壊滅状態の中、「店には行けないけど、家で食べるよ」と冷凍餃子の販売が伸び、結果として全体の売り上げは下がりにませんでした。こうした鹿島名誉法人アドバイザーのまごころは倫理法人会の会長としても発揮されます。

毎週、経営者モーニングセミナーの案内を含めたFAX通信を発信しました。季節や天候のこと、また講話者との個人的な接点など日常的なことを手書きで記し、「ぜひモーニングセミナーにお越しください」とご案内を送りました。心のこもった内容と必ず毎週届く熱意に動かされ、一人また一人と参加者が増えていきました。

その熱が高まる中で、役職者が「日本一を目指そう」と一致団結し、三年目には日本一のモーニングセミナーと言われるまでになったのです。

目の前のお客様や仲間のために、自分自身ができることにまごころを込めて日々生活したいものです。